

大分県内遺跡発掘調査概報 8

2005

大分県教育庁埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は大分県教育委員会が平成16年度国庫補助金を得て実施した大分県内遺跡発掘調査事業の調査概要報告書である。
- 2 調査にあたって県農政部・県林業水産部・県各地方振興局・県内農業基盤整備事業担当課・市町村教育委員会、大分森林管理署の御協力をいただいた。
- 3 本書の執筆は栗田勝弘・高橋信武・山田拓伸が、編集は高橋が担当した。
- 4 発見した遺物は大分県教育庁埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

はじめに	1
I 農業関係遺跡分布調査	2
II 西南戦争戦跡分布調査	4
1 測量調査 佐伯市宇目椎葉山（蛇葛山）	4
2 分布調査	10
1. 大分市吉野・九六位峠	10
2. 大野郡三重町三国峠周辺	10
3. 佐伯市石神峠周辺・場照山周辺	11
4. 佐伯市蒲江町津島畑山・松尾山・陣ヶ峰	11
5. 佐伯市宇目町梓峠付近	14
6. 佐伯市直川村陸地峠	14
3 総括	14
報告書抄録	19

調査組織

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育庁文化課	参事兼課長補佐	渋谷 忠章
	主幹兼埋蔵文化財係長	小林 昭彦
	主幹	後藤 一重
埋蔵文化財センター	所長	伊藤 正行
	次長兼総務課長	益 永 孝 則
調査第一課	課長	高 橋 徹
大型事業担当	主幹	栗田 勝弘・高橋 信武
	副主幹	甲斐 寿義・綿貫 俊一
	囑託	古庄 博之・三田尻 令子（旧姓生野）
		戸田 英佑・谷 尊 祥
調査第二課	資料管理担当副主幹	田中 裕介
	囑託	羽田野 富弘・松田 幸之助
	受託事業担当囑託	加藤 美成子・松浦 憲治
遺物鑑定 JAPAN CARTRIDGE COLLECTOR'S ASSOCIATION		磯野 照明
X線分析 大分県立歴史博物館 学芸課主幹研究員		山田 拓伸

はじめに

今年度は農林業関連の開発に対する分布調査を継続するとともに、新たに西南戦争戦跡の分布調査を開始した。

まず、平成16年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターが市町村教委の協力を得て実施した県内の農林業関係事業（平成17年度工事予定地区）の埋蔵文化財分布調査は82箇所である。工事予定地に対する埋蔵文化財分布調査は平成16年9月に実施した後、追加調査を平成17年2月に実施した。また、国関係等の事業についても分布調査を実施し、3件で試掘調査を実施した。

西南戦争戦跡分布調査は宇目町（本年3月3日より佐伯市）椎葉山で測量調査を実施し、他に県南各所で分布調査を行った。

I 農業関係遺跡分布調査

平成16年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターが市町村教委の協力を得て実施した県内の農林業関係事業（平成17年度予定地区）の分布調査は別表1、2のとおりである。分布調査は平成16年9月に当初予定分の60箇所を実施し、平成17年2月にはその後の追加分の22箇所を実施した。その内訳は、A. 周知遺跡内で確認調査の必要な箇所は9箇所、B. 試掘調査の必要な箇所は16箇所、C. 立会調査の必要な箇所は1箇所、D. 事業実施に問題ない箇所54箇所、E. 再度の分布調査必要箇所は2箇所である。また、国関係等の事業として試掘調査を実施したのは筑後川大山ダム建設事業、糸口厚生園改築工事、花月川・有田川災害復旧等関連緊急事業の3件である。下記の表における市町村名は、今年度後半に行われた市町村合併以前の表記である。

平成16年9月（1～60）、平成17年2月（61～82）に実施した県内遺跡分布調査結果（※前年度調査）

No.	事業名	地区名	工事場所	実施面積ha 実施延長m	振興局名・課名	工事開始 予定時期	関係 市町村	判定
1	中山間地域総合整備	武蔵（花山工区）	武蔵町大字花山	防火水槽1箇所	東国東・耕地	H17.6.1～	武蔵町	D
2	中山間地域総合整備	武蔵（糸原上工区）	武蔵町大字市原	防火水槽1箇所	同上	H17.6.1～	武蔵町	D
3	中山間地域総合整備	武蔵（小城工区）	武蔵町大字小城	防火水槽1箇所	同上	H17.6.1～	武蔵町	D
4	中山間地域総合整備	武蔵（志和利工区）	武蔵町大字志和利	防火水槽1箇所	同上	H17.6.1～	武蔵町	D
5	中山間地域総合整備	武蔵（成吉-1工区）	武蔵町大字成吉	防火水槽1箇所	同上	H17.6.1～	武蔵町	D
6	中山間地域総合整備	武蔵（成吉-2工区）	武蔵町大字成吉	防火水槽1箇所	臼津関・耕地	H17.6.1～	武蔵町	D
7	ため池等整備	花立	佐賀関町大字木佐上	ため池工一式	同上	H17.9.1～ H18.3.31	佐賀関町	D
8	広域農道整備	関臼津	臼杵市大字大浜	路床工L=650m	同上	H17.7.1～ H18.3.31	臼杵市	D
9	広域農道整備	関臼津2期	津久見市大字千怒	トンネル工 L=1018m	同上	H17.9.1～ H18.3.31	津久見市	D※
10	畑地帯総合整備	家野	臼杵市大字家野	パイプライン工 L=2500m	同上	H17.9.1～ H18.3.31	臼杵市	D※
11	中山間地域総合整備	臼杵（半三線）	臼杵市大字広原	路床工L=657m	同上	H17.6.1～ H18.3.31	臼杵市	D※
12	中山間地域総合整備	臼杵（搔懐線）	臼杵市大字搔懐	路床工L=327m	同上	H17.6.1～ H18.3.31	臼杵市	A※
13	中山間地域総合整備	臼杵（左津留線）	臼杵市大字左津留	路床工802m	同上	H17.6.1～ H18.3.31	H16調査 臼杵市	D※
14	広域農道整備	豊南野津	本匠村大字小半	路床工220m	佐伯南郡・耕地	H17.9.15～	本匠村	D
15	広域農道整備	大野南部	野津町大字西畑	路床工800m	大野・耕地	H17.6.1～	野津町	D
16	広域農道整備	大野南部	三重町大字小坂	路床工600m	同上	H17.6.1～	三重町	A
17	中山間地域総合整備	大野西部（西平）	朝地町大字市万田	路床工200m	同上	H17.6.1～	朝地町	D
18	中山間地域総合整備	大野西部（東平）	朝地町大字市万田	路床工300m	同上	H17.6.1～	朝地町	D
19	中山間地域総合整備	大野西部（中原・駒方）	大野町大字中原	路床工1000m	同上	H17.6.1～	大野町	E
20	中山間地域総合整備	大野西部（瀬の口）	大野町大字両家	路床工8000m	同上	H17.6.1～	大野町	D
21	農免農道整備	直北2期	大野町大字北園	路床工500m	同上	H17.10.1～	大野町	D
22	農免農道整備	徳尾2期	緒方町大字平石	路床工900m	同上	H17.10.1～	緒方町	D
23	農免農道整備	巢原2期	久住町大字白丹	路床工8000m	竹田直入・耕地	H17.5.15～	久住町	D
24	経営体育成基盤整備	古園	竹田市大字古園	区画整理工17.0ha	同上	H17.5.15～	竹田市	B
25	経営体育成基盤整備	城原北部	竹田市大字城原	区画整理工26.7ha	同上	H17.5.15～	竹田市	B
26	経営体育成基盤整備	竹田北部	竹田市大字市用	区画整理工2.0ha	同上	H17.10.15～	竹田市	C
27	経営体育成基盤整備	久住南部	久住町大字白丹	区画整理工3.0ha	同上	H17.10.15～	久住町	B
28	経営体育成基盤整備	入田名水（大津留工区）	竹田市大字門田・ 大津留	区画整理工6.0ha	大野川上流開発 事業事務所	H17.10.1～ H18.3.31	竹田市	B
29	経営体育成基盤整備	入田名水（河宇田工区）	竹田市大字入田・ 河宇田	区画整理工6.4ha	同上	H17.10.1～ H18.3.31	竹田市	B
30	広域農道整備	玖珠2期	玖珠町大字岩室	路床工2,400m	玖珠九重・耕地	H17.7.1～	玖珠町	D
31	水田農業振興緊急整備	千町無田	久住町大字田野	暗渠排水20ha	同上	H17.11.1～	九重町	D
32	経営体育成基盤整備	古城	玖珠町大字古後	区画整理工3ha	同上	H17.12.1～	玖珠町	B

33	中山間地域総合整備	玖珠	玖珠町大字古後	区画整理工5ha	同上	H17.12.1～	玖珠町	D
34	経営体育成基盤整備	求来里（神来2工区）	日田市大字求来里	区画整理工9.5ha	日田・耕地	H17.7.1～ H18.3.31	日田市	A
35	経営体育成基盤整備	求来里（求工区）	日田市大字求来	区画整理工9.5ha	同上	H17.7.1～ H18.3.31	日田市	A
36	農地環境盤整備	小野（鈴連工区）	日田市大字小野	区画整理工3.0ha	同上	H17.10.1～ H18.3.31	日田市	B
37	中山間地域総合整備	大山（老松工区）	大山町大字西大山	区画整理工3.0ha	同上	H18.4.1～	大山町	B
38	経営体育成基盤整備	富山	宇佐市大字富山	区画整理工45.8ha	宇佐両院・耕地	H17.10.1～	宇佐市	A
39	中山間地域総合整備	両院2期（竜王工区）	安心院町大字竜王	区画整理工4.5ha	同上	H17.10.1～	安心院	A
40	中山間地域総合整備	両院2期（大重見工区）	院内町大字大重見	路床工950m	同上	H17.12.1～	院内町	D
41	中山間地域総合整備	両院2期（有徳原工区）	安心院町大字竜王	パイプライン 2000m	同上	H17.12.1～	安心院町	E
42	農免農道整備	大副3期	院内町大字沓掛	路床工300m	同上	H17.10.1～	院内町	D
43	農免農道整備	小板場3期	安心院町大字板場	路床工1700m	同上	H17.10.1～	安心院町	D
44	広域農道整備	宇佐第2	宇佐市大字両戒・ 江熊	幅1mL=2100m	同上	H17.10.1～	宇佐市	B
45	森林居住環境整備事業	森林基幹道大分中部線	湯布院町大字中川	200m	大分・林業	H17.5.10～	湯布院町	D
46	森林居住環境整備事業	森林基幹道入蔵大峠線	野津原町大字入蔵～ 沢田	280m	同上	H17.6.10～	野津原町	D
47	森林居住環境整備事業	森林基幹道吉四六線	野津町大字白岩～ 東谷	360m	大野・林業	H17.6.10～	野津町	D
48	森林居住環境整備事業	森林基幹道三国灰立線	三重町大字松尾～ 鷺谷	1200m	同上	H17.6.10～	三重町	AB
49	森林居住環境整備事業	森林基幹道岳滅鬼線	日田市大字小野	700m	日田・林業	H17.6.10～	日田市	D
50	森林居住環境整備事業	森林基幹道曾家中西線	中津江村大字合瀬	2220m	同上	H17.6.10～	中津江村	D
51	森林居住環境整備事業	森林基幹道宇目浦江線	佐伯市大字青山直川 村大字赤水	750m	佐伯南郡・林業	H17.6.10～	佐伯市 直川村	D
52	森林居住環境整備事業	アクセス林道天念寺屋 山線	豊後高田市 大字長岩屋	1200m	西高・林業水産	H17.6.10～	豊後高田市	D※
53	森林環境保全整備事業	森林管理道落水線	同上 大字嶺崎	100m	同上	H17.6.10～	同上	D※
54	森林環境保全整備事業	森林管理道大刈野線	宇目町大字木浦内	390m	佐伯南郡・林業	H17.6.10～	宇佐市	D
55	森林環境保全整備事業	森林管理道大門定別当	院内町大字大門	700m	宇佐両院・ 林業水産	H17.6.10～	院内町	D
56	森林環境保全整備事業	森林管理道一の鳥居線	津久見市大字八戸	300m	白津関・林業	H17.6.10～	津久見	D
57	森林環境保全整備事業	森林管理道葛葉西山線	宇目町大字木浦内～ 南田原	700m	佐伯南郡・林業	H17.6.10～	宇佐市	D
58	森林環境保全整備事業	森林管理道栗桐線	九重町大字栗野～菅 原	600m	玖珠九重・林業	H17.6.10～	九重町	D
59	森林環境保全整備事業	森林管理道筒井原 葛路線	直入町大字長湯	700m	竹田直入・林業	H17.6.10～	直入町	D※
60	大野川上流農業水利事業 高練木支線水路工事		荻町大字桑木、 柏原	0.06ha	大野川上流農業 水利事業所工事	H17.9～ H18.3	荻町	D
61	障害防止対策事業	久木野尾川	山香町久木野尾	管理道路（右岸） L=1023m	別杵速見・ 水利開発	H17.9.1～	山香町	D
62	障害防止対策事業	久木野尾川	山香町久木野尾	管理道路（左岸） L=580m	同上	H17.9.1～	山香町	D
63	障害防止対策事業	久木野尾川	山香町久木野尾	管理道路（下流） L105m	同上	H17.9.1～	山香町	D
64	障害防止対策事業	久木野尾川	山香町久木野尾	ダム本体工10.6ha	同上	H17.9.1～	山香町	D
65	障害防止対策事業	久木野尾川	山香町久木野尾	土取場工2.4ha	同上	H17.9.1～	山香町	D
66	障害防止対策事業	久木野尾川	山香町大字南畑	土取場工20ha	同上	H17.9.1～	山香町	B
67	一般農道整備	溝井2期	杵築市大字溝井	道路工800m	同上・耕地	H17.6.1～	杵築市	B
68	中山間地域総合整備	杵築速見2 期報国工区	山香町大字広瀬	区画整理工4.5ha	同上	H17.5.1～	山香町	B
69	中山間地域総合整備	杵築速見2 期鹿倉工区	杵築市大字相原	集落道515m	同上	H17.5.1～	杵築市	D
70	中山間地域総合整備	杵築速見2 期茅場工区	杵築市大字大内	集落道586m	同上	H17.5.1～	杵築市	D
71	中山間地域総合整備	杵築速見2 期篠原工区	杵築市大字大内	用排水路100m	同上	H17.10.1～	杵築市	D
72	ため池等整備	中の迫	山香町大字山浦	土取場工2ha	同上	H17.10.1～	山香町	D
73	農免農道整備	大内2期	杵築市大字大内	道路工520m	同上	H17.6.1～	杵築市	D
74	中山間地域総合整備	中津江	中津江村大字合瀬	道路工1000m	日田・耕地	H17.7.1～	中津江村	D
75	一般農道整備	湯原2期	真玉町大字西真玉	道路工900m	西高・耕地	H17.7.1～	真玉町	D
76	田園空間整備	西高（並石工区）	豊後高田市大字一畑	区画整理工4.0ha	同上	H17.6.1～	市と 協議済	B
77	農村振興総合整備	諸田定留	中津市大字諸田	区画整理工6.9ha	中津下毛・耕地	H17.10.1～	中津市	B
78	地域用水環境整備	大貞	中津市大字大貞	親水施設工1.4ha	同上	H17.9.1～	中津市	D

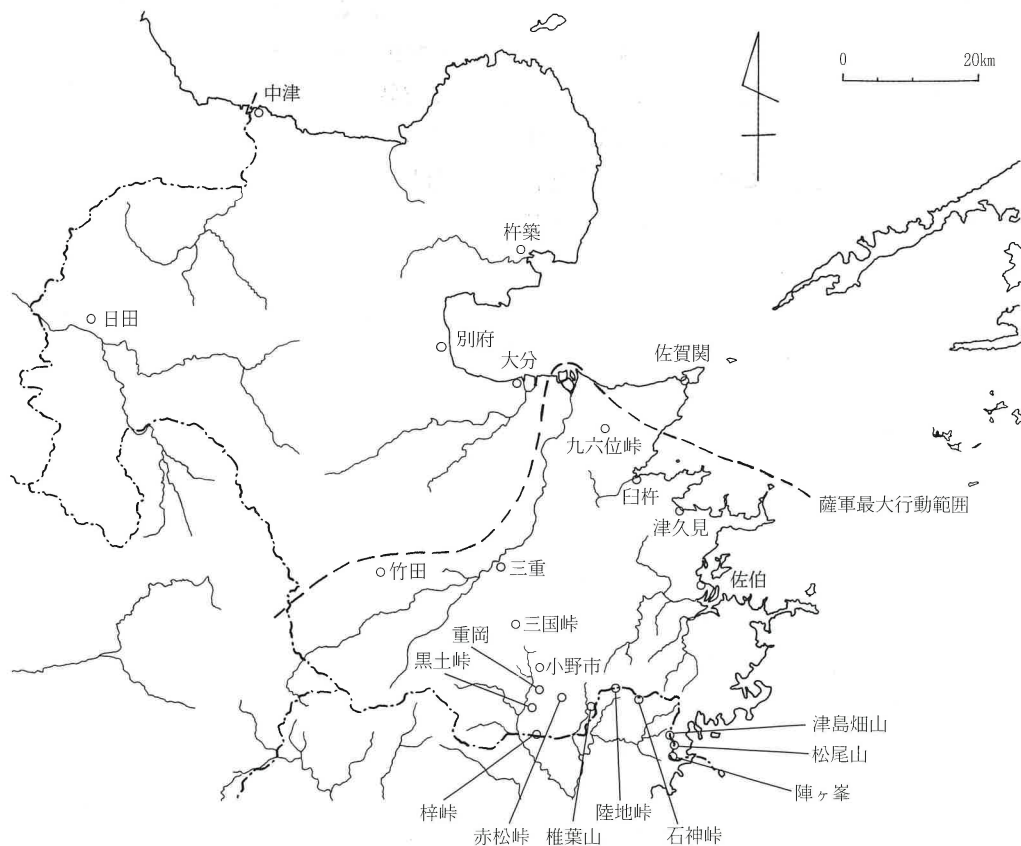
79	中山間地域総合整備	山国	山国町大字長尾	路床工1000m	同上	H17.9.1～	山国町	B
80	中山間地域総合整備	山国	山国町大字中摩	区画整理工5.3ha	同上	H17.9.1～	山国町	A
81	経営体育成基盤整備	丹川1工区	大分市大字丹川	区画整理工9.1ha	大分・耕地	H17.10.1～	大分市	A
82	広域農道整備	宇佐第2	宇佐市大字両戒	道路工2100m	宇佐両院	H17.10.1～	宇佐市	
83	筑後川大山ダム建設事業	大山ダム 大山町大字大地	国土交通省筑後川河川事務所	独立行政法人水資源機構大山ダム建設所		H16.10 試掘	大山町	試掘終了
84	糸口厚生園改築工事	宇佐市	県社会福祉	同左		H16.9 試掘	宇佐市	試掘終了
85	花月川・有田川災害復旧等関連緊急事業	日田市南友田地先		国土交通省筑後川河川事務		H16.7 試掘	日田市	試掘終了

II 西南戦争戦跡分布調査

西南戦争は幕末・明治維新期内乱の最後をなすもので、反政府活動は戦後、言論による政治運動に替わった。この戦争は1877（明治10）年2月22日から9月24日まで、熊本・宮崎・鹿児島・大分各県を戦場に巻き込んで行われた。戦場となった平野部では延々と数km伸びた塹壕が作られ、丘陵や山では台場が作られたと記録されている。

県下が戦闘に巻き込まれたのは5月12日であった。反政府軍すなわち薩軍は初め佐伯市重岡に侵入し、以後竹田（5月）・鶴崎（5月）・三重（5月）・臼杵（6月）・佐伯市宇目、本匠、直川、蒲江（6～7月）等で政府軍と激戦を繰り広げた後、宮崎県との県境地帯で8月15日まで対峙したのである。特に宇目では5月から8月まで戦場となり、戦場となった地域には多数の戦跡が現在も残っている。

大分県内に我が国近代史の一大事件を証言する戦跡が存在することは、一部では知られていた。三重町指定文化財の三国峠戦跡（旧本匠村も指定）あるいは周知遺跡の木ノ元山の陣、旧直川村指定文化財の西南戦役古戦場陸地峠、旧蒲江町指定文化財の西南の役津島畑山古戦場などがそれである。しかし、これら以外にも多数の戦跡が戦場となった地域に存在することが明らかになりはじめ最近、その戦跡についても考古学的な関心から注意が払われるようになった（西南戦争を記録する会2000「西南戦争を考古学的に見る」『大分県地方史』第181号）。三重町木ノ元山遺跡では



大分県の西南戦争関係地図

携帯電話中継塔の建設に関連し台場跡の発掘調査が行われている（諸岡郁「三重地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ」三重町教委 2004）。上記の指定文化財・周知遺跡以外にも、大分県南部地域にかなりの戦跡が残っていると推定されるようになり、大分県教育委員会では県内遺跡発掘調査の中で中世城館跡分布調査に引き続き、西南戦争戦跡の分布調査を行うこととなった。今年度は、宇目所在の椎葉山戦跡の測量調査を行うとともに、大分市、佐伯市蒲江、直川・宇目、三重町で分布調査を実施した。山城跡の場合のように、大部分地元でその存在を把握していたものとは違い、西南戦跡は地元でもほとんど所在状況をつかんでおらず、踏査は戦記類を参考に五里霧中で開始した。戦記に出る付近の山を風漬しにすべて踏査することは短期間には不可能で、現実には、上記の市町村もごく僅かしか踏査できなかった。椎葉山遺跡を除いて、分布調査で作成した略図は平板・測量機器は使用せず、巻き尺と磁石だけを用いたことを断っておきたい。

1 測量調査 椎葉山（蛇葛山）

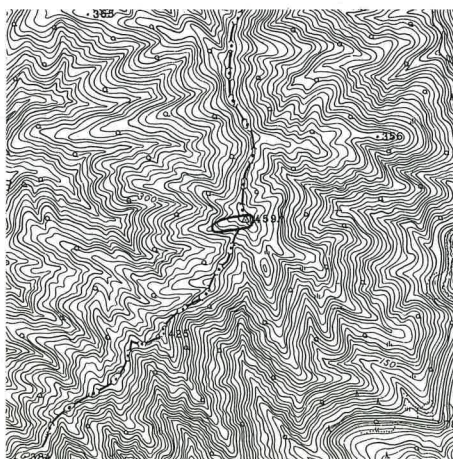
所在地 佐伯市宇目大字大平三本国有林1,084

はじめに

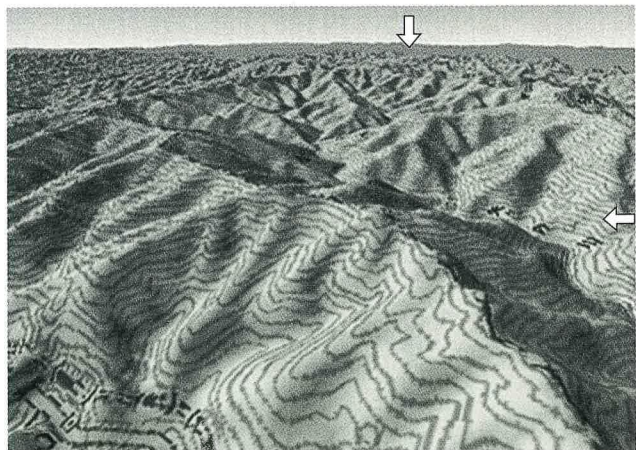
大分県南部の県境地帯は明治10（1877）年6月から8月まで戦場となっている。椎葉山は薩軍が守備を固めていた場所である。国道10号の東側を南北に走る県境でもある尾根線、及びそれから西方の県内方向に派生した尾根上に台場跡が5基並んで分布する（西南戦争を記録する会2003「西南戦争之記録」第2号）。当時、椎葉山の南、東にあたる地域は薩軍の支配地域であり、同じ尾根線上、約2km南にある宗太郎越やその南の観音山にも薩軍が守備中であった。また、西方の水ヶ谷周辺では7月27日に黒土峠・板戸山を官軍が奪ったために薩軍は南側の梓山一帯に立て籠もり、水ヶ谷集落を挟んで両軍が対峙する状態であった。8月6日早朝、官軍は椎葉山の北の方から薩軍陣地に向かって攻撃を仕掛け、激戦となった。

薩軍側の立場で西南戦争全体を記述した加治木常樹著「薩南血涙史」によると、この戦闘に該当するのは「官軍大原方面矢河内攻撃の議を決し其の部署を定め午前一時より進軍し黎明敵壘を襲撃せり」とあるのみで具体的な場所の記述はない。一方、官軍の公式戦記「征西戦記稿」ではこの日、椎葉山を攻撃したことになっているが、直接の当事者が作成した「熊本鎮台戦闘日記」附録死傷之部には、8月6日は蛇葛山という場所で多数の死傷者が生じたことを記録している。同一場所であろう。宇目町の、ある山の頂上には標高459.7mの三角点があり台場群がある。国土地理院地図検索システムで調べると、この三角点の所在地名は椎葉山となっており、蛇葛山ではない。調査の際、車を国道10号の脇に駐車しそこから小一時間歩いて登ったのだが、毎日渡った橋の名が蛇葛橋じかづらとなっていた。蛇葛山というのも全く根拠のない地名とはいえないわけだ。

戦争末期のこの時期、薩軍側は武器・弾薬の欠乏に苦しみ、通常は鉛製である銃弾を錫や銅あるいは鉄で代用していたとされている。この日の戦闘は大分県内では最後の戦闘らしい戦闘であり、台場跡の測量と共に遺物の回収にも意を注いだ。



椎葉山の位置（1/25,000）



椎葉山（矢印交点）（カシミール3D使用）

戦跡の状態

基準点測量を業者に委託し設置してもらったので、それを基準に頂上から下に向かって順に測量していった。樹木の生い茂った山林では光波トランシットは使いにくいかと予想したが、意外に便利だった。上から順に遺構番号を付け、台場1から台場5と呼ぶことにする。これらは椎葉山の頂上から大分県側に西南西に延びる尾根線に一直線に並んで存在する。

三角点から続く尾根線は北西、西南西（台場群の並ぶ尾根）、東南の三方向であるが、三角点から南は尾根線が県境になっておらず、県境は椎葉山の三角点から南南西方向の広い急斜面に引かれているようである。数十m下がった位置に始まる尾根が県境である。従って、樹木が繁茂し見通しがきかないので、南方のエゴオノ山や宗太郎越方向に向かって踏査を試みたが道に迷ってしまった。結局後日、逆に宗太郎越から北に向かって尾根線を踏査し、椎葉山に辿り着くことができた。県境尾根は下の方でさきに述べた急斜面にぶつかり、そのまま登り着いた尾根を20mほど上、右手に行くと台場5が現れた。

時間的な余裕がなかったので、等高線を充分測量できなかった。台場群から下った谷斜面で多くの遺物を発見した。等高線を図化しなかった部分も斜面の途中であり、谷はまだ下の方まで続いている。

台場1は椎葉山の頂上を占め、半円形の土塁部が北側を向いて存在する。土塁部分の規模は南北10m、断面の幅は2.5m前後、北部での高さは1m弱である。内側は東から中央部分を掘り残して、他の部分を掘り下げて作った平坦面が巡る。内部の平坦面が背後に長く続く点の特徴的である。中央部分に三角点がある。北に面する土塁部分外面でスナイドル銃弾7点、スペンサー銃弾2点（1点は以前採集されたもの）を発見した。

台場2は台場1の1m西から始まる長さ5.0mの土塁部分と削り出された南側の平坦部からなる。その平坦部と台場1との間も人工的な平坦面である。土塁部分の先端で四斤砲弾片を見つけた。少し埋まっていた。

台場3は台場2の2.6m西、3m低い場所にある。尾根の中軸をはずした場所に設置されている。北から西に土塁部をめぐる内側は窪み、スナイドル銃の薬莢1点を発見した。遺構の規模は南北6.2m、東西4.0mである。

台場4は台場3の西側12.8mにあり、尾根の中軸に位置する。土塁部は北から南西にめぐる。内側は三段の平坦面をもつ。

台場5は台場4の22m西側に位置し、標高では8m下になる。台場1を小型化したような形で、土塁部分の幅は6.3mで、東西方向の長さは8.7mである。北東側には倒木のある風倒木の穴があいている。台場4から5の北斜面には風倒木痕が目立つ。

頂上の台場1から最下部の台場5までの標高差は23mであり、両端の水平距離は73mである。台場1から台場3は土塁部が一直線に並ぶ点、相互に近接している点などから全体で一つのような連続性が認められる。

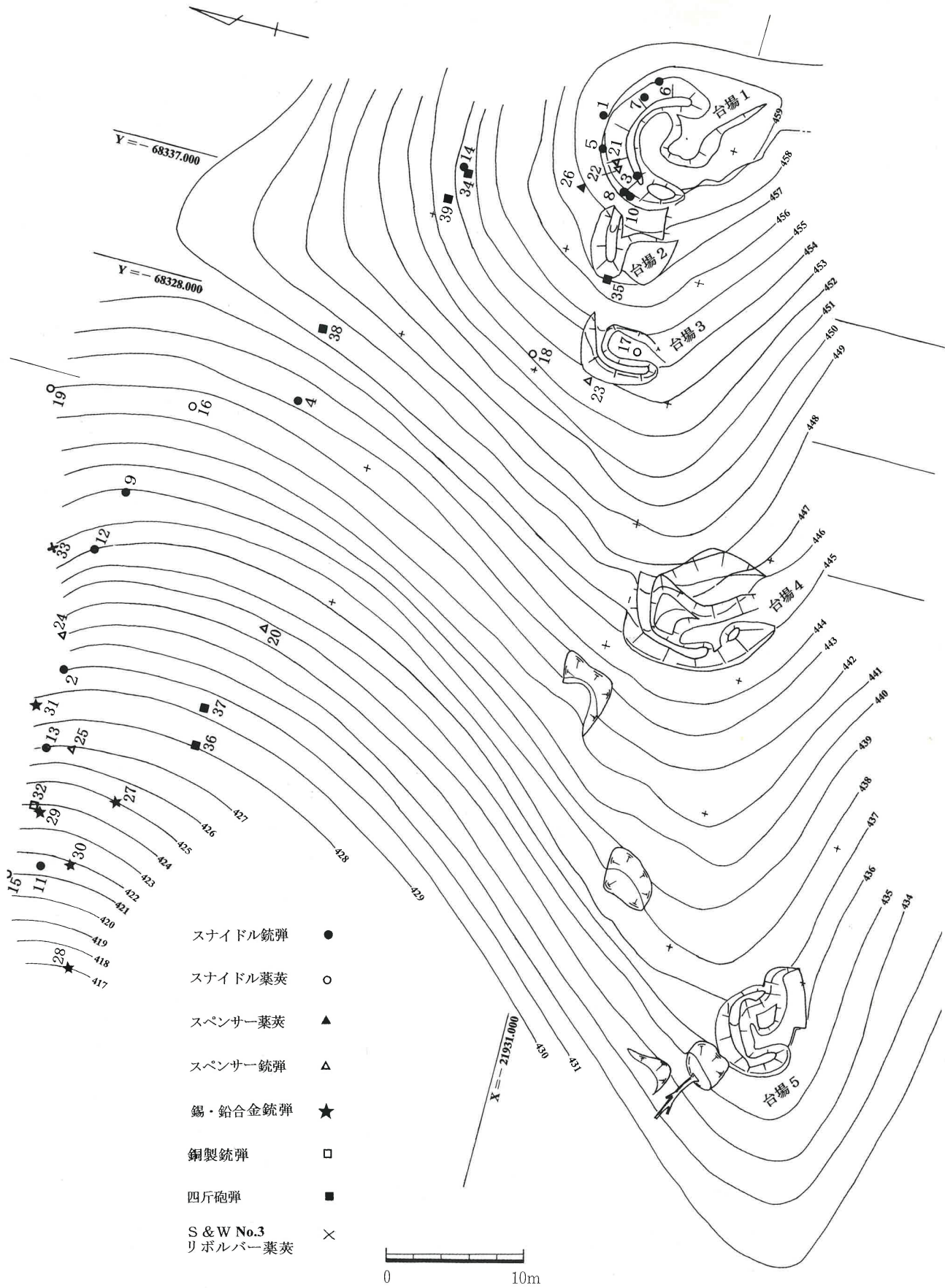
遺物の分布状態

椎葉山では以前に西南戦争を記録する会の踏査によって、台場1の土塁部外側でスペンサー銃弾1点が採集されている。今回の調査では金属探知器を使って遺物を探した結果、銃弾26個・薬莢7個・砲弾片6個を採集した。遺物の分布状態はP5の図に示すとおりである。台場1から台場3までの北面と、そこから北側の尾根上部、その北に続く尾根の西側斜面に帯状に分布する。

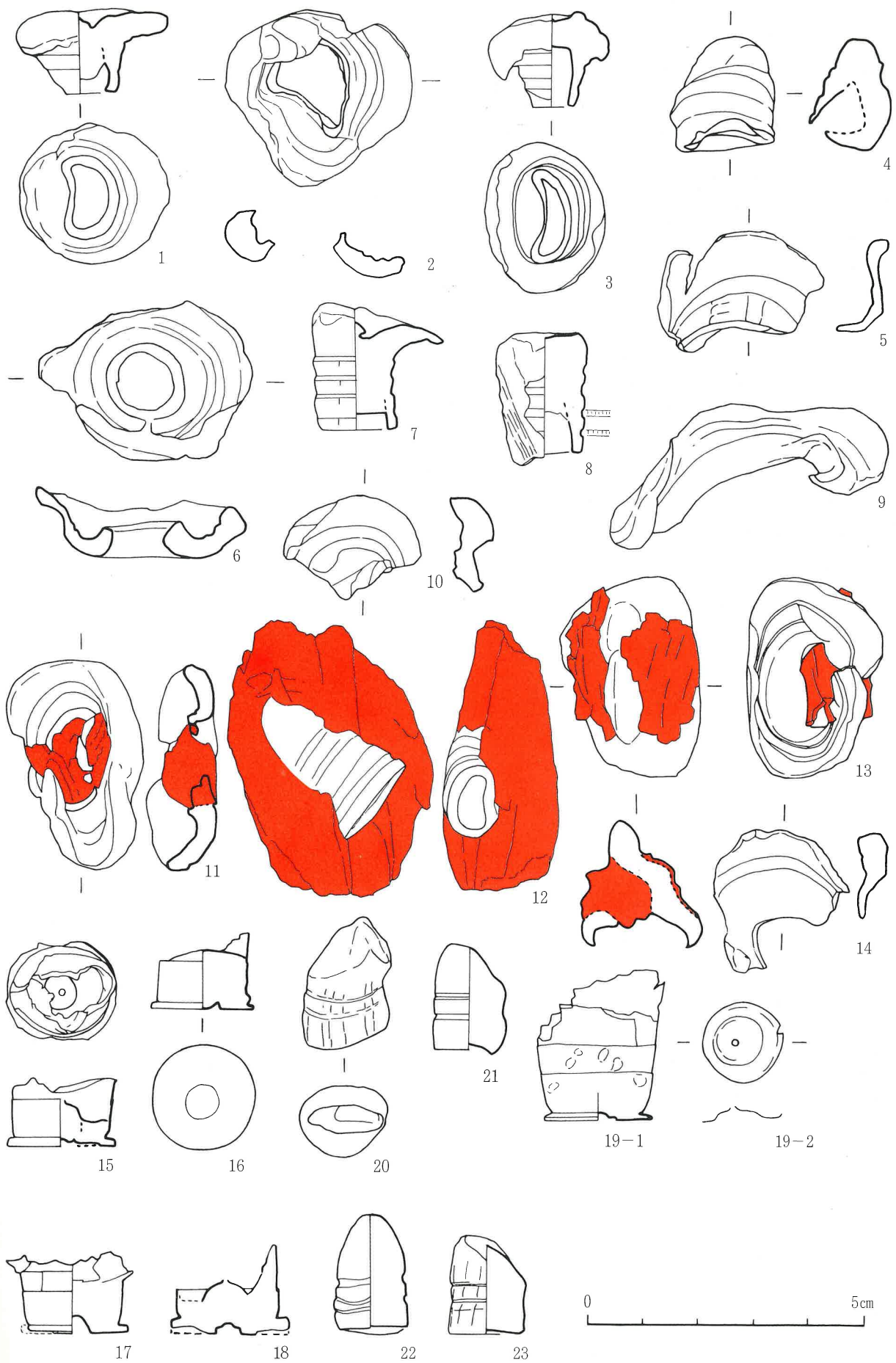
種類毎の分布状態をみておこう。錫と鉛の合金製銃弾と青銅製銃弾は薩軍のものであるが、台場群から40m以上離れた谷の下方一帯（北西集中部と呼ぼう）にまとまって存在した。スナイドル銃弾はその北西集中部から台場1に向かって帯状に分布する。特に台場1の北側の面に集中している。スナイドル銃の薬莢は台場2と北西集中部から台場1の方向にかけて分布する。スナイドルの一部は薩軍も使用したかも知れない。短銃の薬莢1点が北西集中部縁辺にあった。四斤砲弾片は台場2、その北から北西部に分布する。当時の大砲はガラガラ動く車輪の上に在ったため、正確な照準及び射撃修正は難事であった。二、三kmも離れた場所から砲撃したであろうことを考えれば、台場付近の谷の中に散乱しているのも命中したようなものだろう。



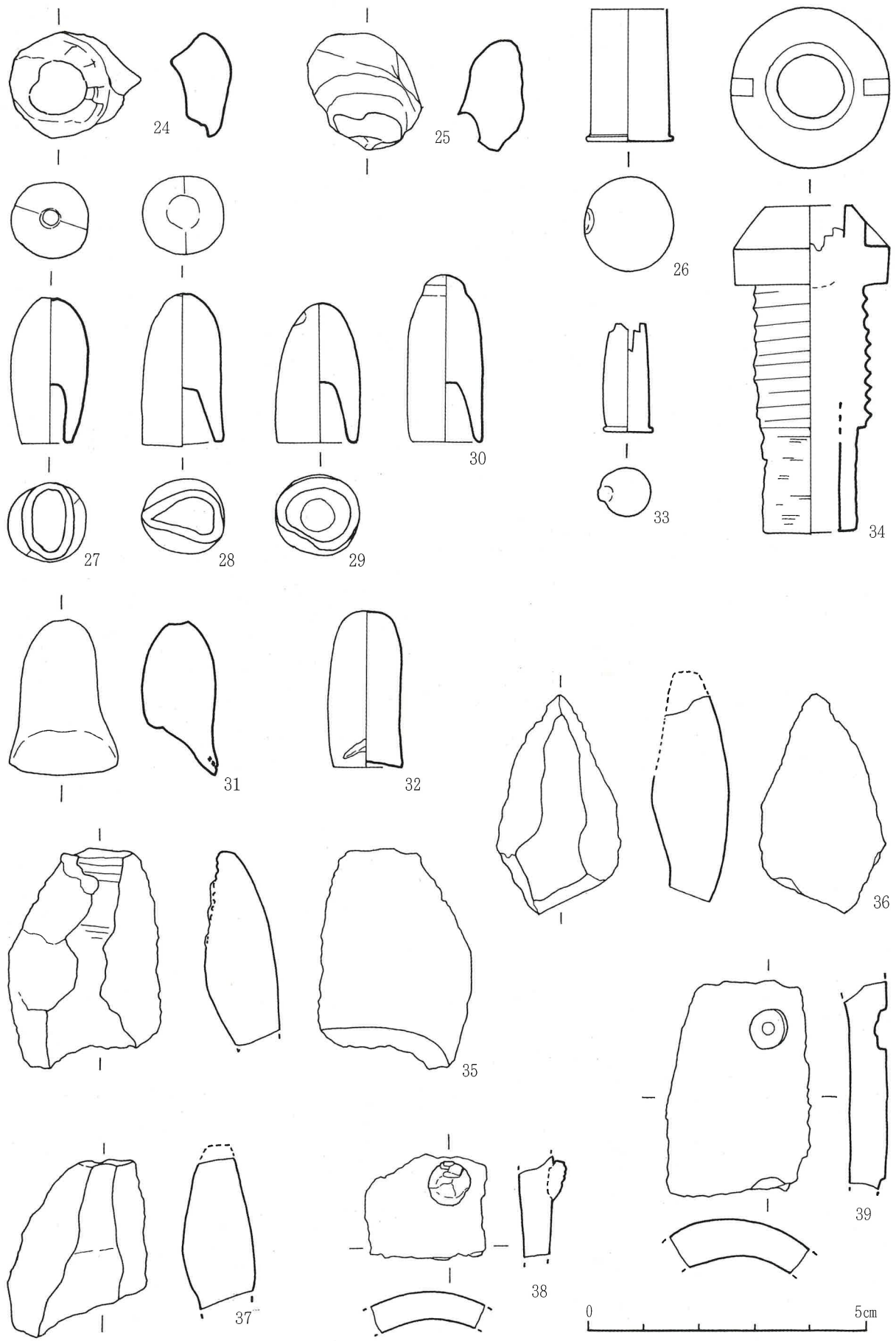
椎葉山台場4 (東から)



椎葉山戦跡地形測量図



椎葉山発見遺物実測図 1



椎葉山発見遺物実測図2 (※35~39は1/2に縮小している)

遺物 (1～37)

1～14はスナイデル銃弾である。1の陶栓は壊れている。12は地面に埋まっていた。立ち木に撃ち込まれたらしく、約45度の角度でめりこんでいる。11・13は木にぶつかったらしく、木が固着している。16・19-1の外底面円盤は鉄ではなく銅製で、27の内面の盛り上がった面は金属的である。19は噛まれたように押し潰され、19-2は内部に挟まっていた。発火部分も押し潰されており、本来、金属板を圧延加工したものであることがわかる。21から23のライフルは6条である。27～30は錫と鉛の合金で、31下部は潰れている。木芯があったのか木質痕がはみ出ている。32は薩軍が鉛・錫の欠乏により作った銅製弾である。26・33の外



椎葉山台場5 (北東から)

底面には打撃痕がある。33は短銃用である。34～39は四斤砲弾破片。34は信管で、先端内部に固い陶器のようなかけらが入っている。ネジ山は破損し、下部のネジ山は細い。36・37上部のネジ溝は錆びて不鮮明である。38には側面に付く鋸(砲身内部の旋條に喰い込む)がある。39には鋸のための穴2個がある。

椎葉山遺跡発見遺物観察表

No	種類	重量g	直径cm	全長cm	No	種類	重量g	直径cm	全長cm
1	Snider Bullet	30.4			21	Spencer Bullet	22.7	1.34~1.28	1.95
2	Snider Bullet	27.0			22	Spencer Bullet	22.8	1.28~1.30	2.04
3	Snider Bullet	28.7			23	Spencer Bullet	22.8	1.34~1.28	
4	Snider Bullet	23.0			24	Spencer Bullet	18.2		
5	Snider Bullet	11.5			25	Spencer Bullet	22.9		
6	Snider Bullet	24.4			26	Spencer Cartridge	3.9		
7	Snider Bullet	30.3	1.50		27	Minie Bullet	26.1	14.0	26.2
8	Snider Bullet	29.7			28	Minie Bullet	28.9	14.0	27.7
9	Snider Bullet	29.2			29	Minie Bullet	24.9	14.6	24.8
10	Snider Bullet	12.6			30	Minie Bullet	30.7	14.1	30.1
11	Snider Bullet	28.8			31	Minie Bullet	29.2	14.1	27.7
12	Snider Bullet	46.1			32	Minie Bullet	22.8	13.9	27.9
13	Snider Bullet	30.6			33	.32Rimfire Cartridge	0.8	筒部8.0	1.98
14	Snider Bullet	9.6			34	四斤砲弾信管	77.6	2.75	5.95
15	Snider Cartridge	5.1			35	四斤砲弾	323.9		
16	Snider Cartridge	9.1			36	四斤砲弾	238.0		
17	Snider Cartridge	5.6			37	四斤砲弾	223.4		
18	Snider Cartridge	5.3			38	四斤砲弾	78.4		
19	Snider Cartridge	9.3/0.3	底円盤1.88		39	四斤砲弾	278.4		
20	Spencer Bullet	22.4							

椎葉山遺跡出土銃弾・薬莖の分析

山田 拓伸

大分県佐伯市宇目に所在する椎葉山で出土した西南戦争期の銃弾・薬莖の一部について蛍光X線分析を行った。試料は薬莖1点、銃弾6点の計7点である。薬莖の分析は基底部について行った。なお、これらの銃弾は薩摩軍から発射されたものという。

分 析

各試料は分析を始める前に表面のクリーニングを行い、アセトンで脱脂して分析を行った。蛍光X線分析装置の測定条件等は次のとおりである。

蛍光X線分析装置

フィリップス製：PW2400L S II

管 球：スカンジウム管球

出 力：60KV、40mA

検 出 器：シンチレーション検出器、ガスフロー検出器

結 果

分析の結果をもとに表2を作成した。各試料からは他にNa、Mg、Al、Si、P、S、Cl、K、Ca、Crを検出しているが、これらは試料表面に付着した土や装置自体がもつ成分もあり、表2には記していない。

表2

試 料	主 成 分	微 量 成 分
1 6 薬莖	Cu、Sn、Pb	Zn、As、Ag
2 7 銃弾	Sn、Pb	As
2 8 銃弾	Sn、Pb	Cu、As、Ag
2 9 銃弾	Sn、Pb	Fe、Zn、As、Sr、Zr
3 0 銃弾	Sn、Pb	Cu、As、Zr、Ag
3 1 銃弾	Sn、Pb	Mn、Cu、As
3 2 銃弾	Cu、Sn、Pb	Fe、Cu、As、Ag

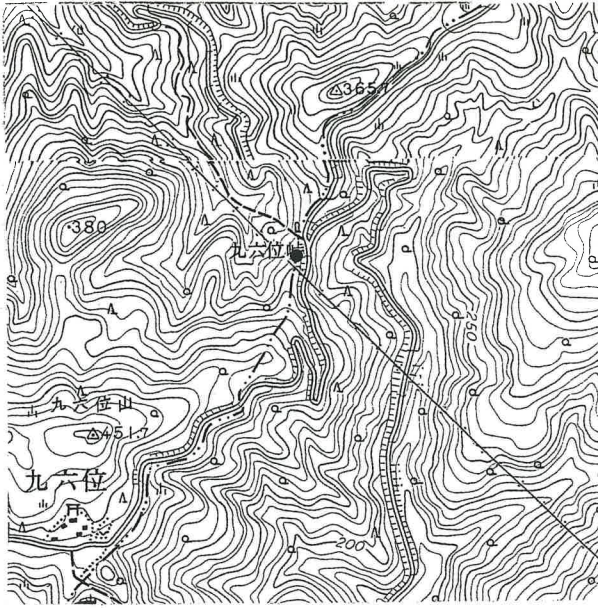
薬莖と36銃弾は銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）を主成分とした青銅である。他の銃弾は錫と鉛を主成分とし、それらの分析チャートのピーク強度から鉛よりもむしろ錫を多く含むことが窺える。この時期の銃弾は普通鉛を主成分としているが、分析した銃弾は錫成分が多いようである。薩摩軍では戦況の悪化に伴い鉛の確保に窮し、その代用として錫を混入したのであろう。

2 分 布 調 査

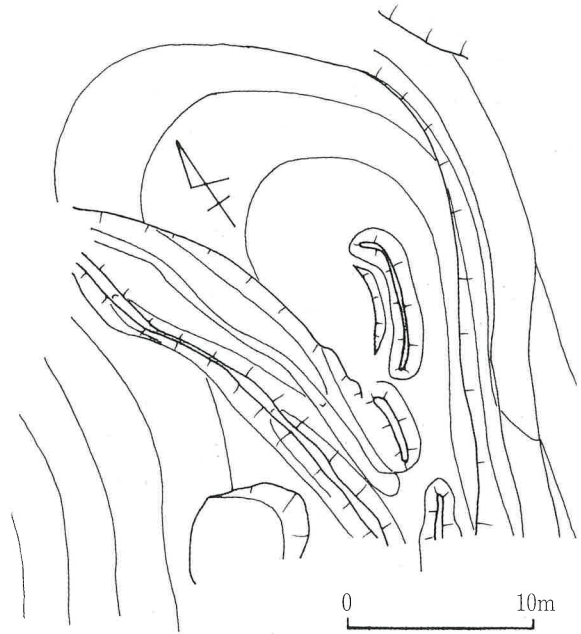
1. 大分市吉野峠・九六位峠

6月上旬、臼杵を占拠していた薩摩軍に対して官軍の大部分の部隊は北方、西方の大分市から出撃した。吉野峠・九六位峠・再進峠に前夜野営したと記録にある。大分市大字吉野字峠付近を踏査し台場跡がないか捜してみたが、発見できなかった。また、大分市と臼杵市を結ぶ主要な道路として使われている九六位峠付近も踏査し、一基の台場跡を発見した。峠頂上の車道の西側10mくらいの位置に、臼杵側を向いて弓なり状に土塁部があり、内側は窪んでいる。台場の背後を東西に走る凹道が旧道らしい。

台場の右手には尾根線に土塁状のものが頂上に向かって延々と続いているが、頂上付近では尾根線よりも北側の背後にさがっている点からこの長い土塁状のものは戦跡ではないと判断した。



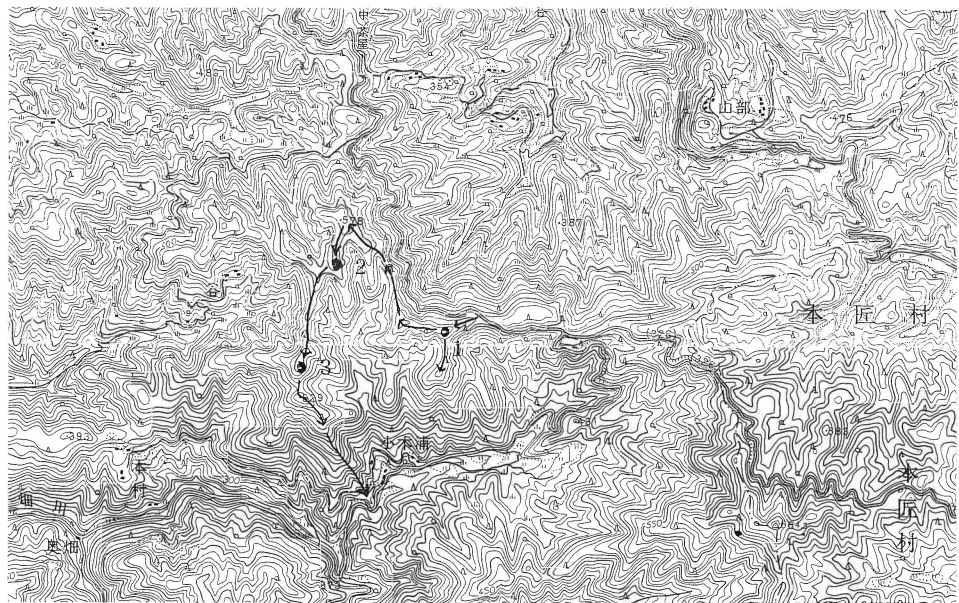
九六位峠の位置 (1/25,000)



九六位峠の台場略図

2. 三重町三国峠周辺

三重町と本匠村の境界尾根線には両者の指定文化財である三国峠戦跡がある。三国峠から尾根続きの西方に旗返峠の台場が知られている。三国峠では薩軍台場跡2基が知られているが、数日間の激戦が行われた場所であり、尾根の続きにはこれ以外にも当然多数の台場跡が存在すると思われる。これらに対峙して相当広



今回発見した台場跡と踏査路 (1/25,000)

範囲に官軍側が台場を作ったと官軍の記録にあるが、確認作業は手つかずである。「熊本鎮台戦闘日記」6月15日記事によれば、

午前第四時三国峠旗返シノ兩所ニ開戦三国峠ノ正面ハ大嶺越七回り越ノ兩道ヨリ侵入三国ノ境山ヲ畧取彼ヲ距ル五百米突ノ地ニ胸壁ヲ築キ之ニ據ル左翼モ加藤越ヲ奪ヒ之ヲ固守ス旗返シロハ頻ニ大砲ヲ發射シ胸壁數ヶ所ヲ撃破ス

今回はこの官軍の台場跡の一部を捜す目的で周知の三国峠台場跡の北西側1km前後の範囲にある三重町小木浦の山林を踏査し、3基の台場跡を発見した。相互に数百m離れて存在する。すべて三国峠の方を向いており、官軍の作ったものであろう。今回は地点を地図に落とす作業だけであった。この一帯の分布状態は現時点ではほとんど不明であり、今後明らかにしてゆきたい。

3. 佐伯市石神峠周辺・場照山周辺

県境の激戦地であった陸地峠の東方で最も近い位置の県境峠が石神峠である。宮崎県三川内と大分県佐伯を結ぶ路線にある。薩軍が守備し、官軍が北側から攻撃し奪った場所として記録に出ている。

今回は峠から西に向かって陸地峠側に約2km、反対に東に向かって約2km、場照山までの県境である県境尾根線を踏査したが、台場跡はまったく確認できなかった。石神峠では宮崎県側に入った位置に薩軍台場があったのかも知れない。

4. 佐伯市^{つしまばたやま}蒲江津島畑山・松尾山・陣ヶ峯

津島畑山では7月16日に戦闘があった。前夜宮崎県北浦町歌糸村を発した薩軍約200人は暴雨を冒して山道を進み、夜明けにこの官軍台場を攻撃して官軍を波当津に退けた。官軍側の戦死19人、負傷28人という蒲江町では代表的な戦闘があった。

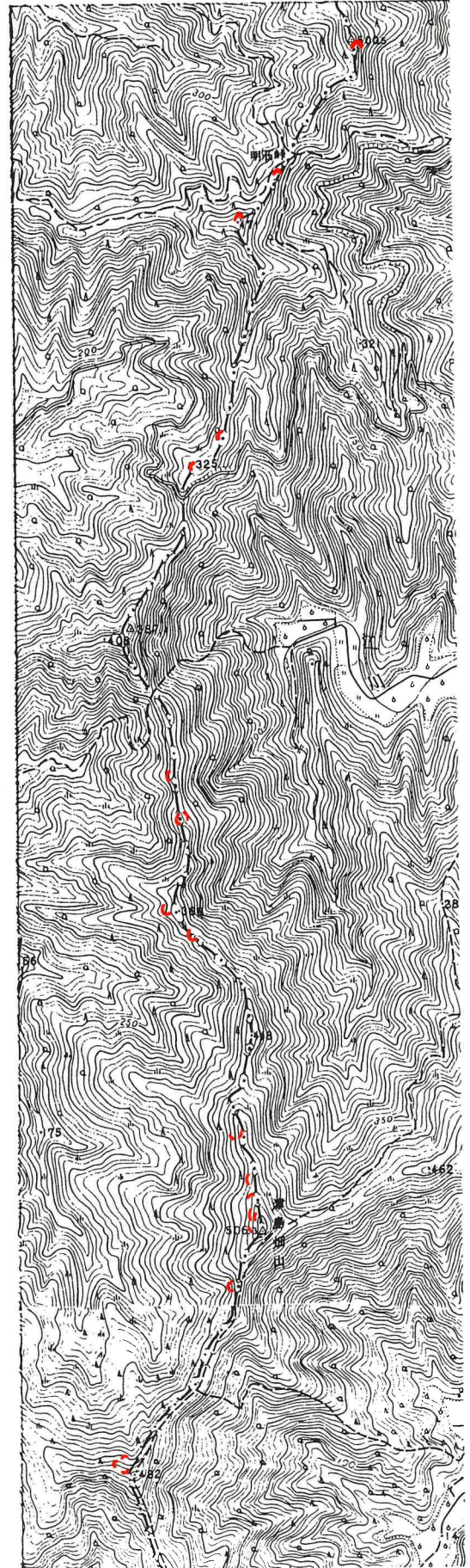
旧蒲江町における県境は連続した尾根線である。津島畑山の部分は県境尾根で最大の平坦面があり、名前のとおり畑作も可能な平坦部があり、中央に三角点立つ。三角点の東南に3基、北西側に4基の台場がある。東西の距離は約110mある。台場は南北の尾根の方向と宮崎県側である西を向いて作られている。山の南側の^{たお}塚部分に西側を向いた台場が1基ある。

今回の分布調査では地点を確認しただけであるが、国道388号以南、津島畑山以北の尾根には8基の台場を発見した。

一方、地図上端の標高500.5m三角点「萱場」で1基（萱場以北には台場はない模様である。場照山に続く南側峠付近まで踏査したが発見できなかった）、明石峠で1基、峠南側の471mの頂上で1基がそれぞれ北向きにあるのを発見した。その南、国道388号の北側に西向きの台場2基を確認した。その北側の裾には古道が東北から南西に向かって走っている。

松尾山は津島畑山の南に続く尾根を500mほど行った場所にある峯で、この部分はT字形に尾根が分かれる分岐点である。県境尾根は南北に延び、西側には宮崎県内奥深く延びる尾根が分かれている。薩軍は西側尾根を伝って容易に豊後水道に面する場所まで行ことが出来、松尾山は両軍にとって重要な地点となった。

7月16日に津島畑山を攻めた薩軍はここを利用したようで、逆に8月2日には津島畑山から官軍が松尾山を攻め、奪っている。松尾山の頂上で3基の台場跡を発見した。台場2と3は北の津島畑山及び海岸部を向いており薩軍のものであろう。台場1は西向きで明らかにここを奪った後で官軍が宮崎方向の薩軍に対して作ったものであろう。



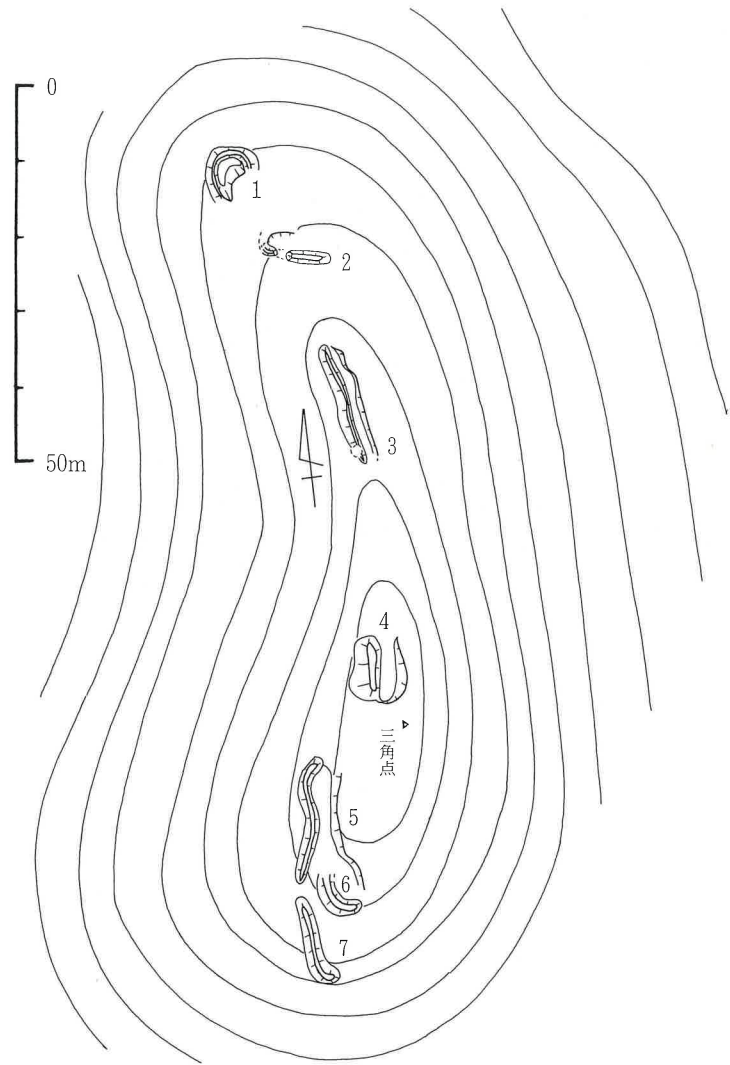
石神峠から陣ヶ峯まで (1/25,000)

松尾山から南、陣ヶ峯までは台場は確認できなかった。

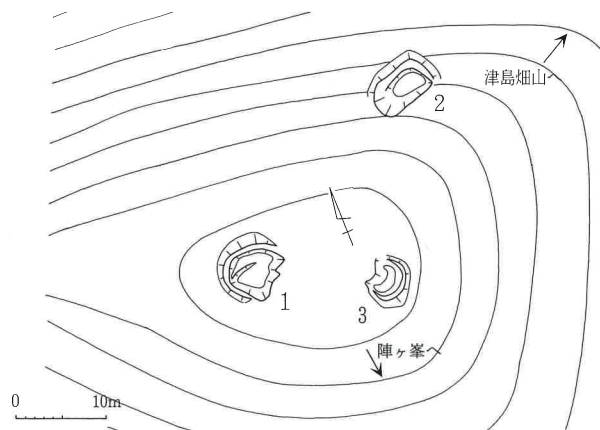
陣ヶ峯は薩軍が守備していた場所である。頂上には携帯電話か何の中継塔があり、原地形は損なわれている。したがって、台場があったか否かはわからない。宮崎県北浦町直海から車で登ることが出来る。南西の尾根を進むと古江の港を見下ろす所まで達する。

中央部分に三角点があるところだけは平坦な原地形が残っている。見晴らしがよく、北は木陰に津島畑山が見え、東は豊後水道、西は祖母・傾から尾鈴山までも眺められる。

以上、蒲江の県境尾根線にある台場跡の分布状態は、陸地峠付近以西の県境尾根線に比べたら非常に散漫である



蒲江津島畑山の戦跡略図

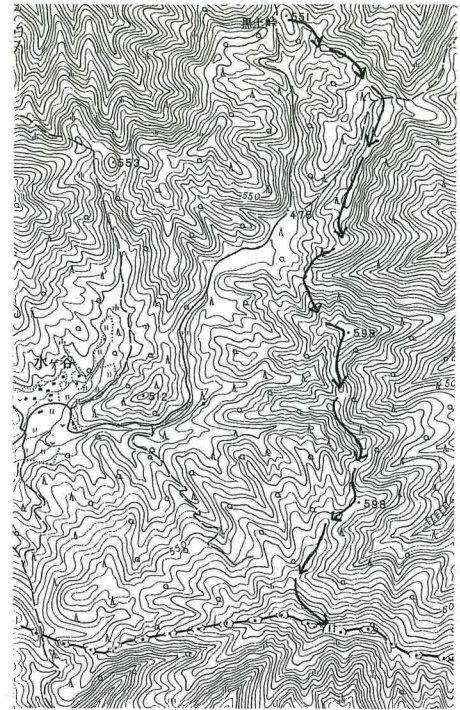


蒲江松尾山の戦跡略図

5. 佐伯市宇目梓峠付近

県内最大の激戦地である。梓峠は県境に位置し、古代の官道路線上にある。西南戦争の4年前まで大分と宮崎を結ぶ公式路線はここを通過していた。問題は峠部分から大分県内に入った後、具体的などの場所に道路があったかが不鮮明な点である。従来は峠から北西に斜面をジグザグに下り、水ヶ谷集落付近に出て黒土峠に登ってゆく、とされていた。戦争記録では、黒土峠から一直線に南に進んで梓峠に至ったり、梓峠からまっすぐ黒土峠に進んだ記事があり、水ヶ谷に立ち寄る路線とは異なる通行方法が見られる。これに注目して現地を踏査してみた。

結論としては、梓峠直前は急斜面ではあるが、他県の例からこのような場所でも古代の官道として可であろうと考えられた。黒土峠からここまで比較的通りやすい尾根が続いており、古代路線があったことを否定する地形ではない水ヶ谷集落北東側から登る現行のジグザグ道路は台場跡を切って通っている場所が見られ、戦争時代に遡らない可能性があるようだ。黒土峠から北側、特に700mほど北側には近世後期の分岐点道標がある。「右しげおか 左くらおの」とあり、今回は「左くらおの」を歩き、尾根を縫う古道を途中まで確認したが尾根がいくつにも分かれており、分布調査は一部分にとどまっている。

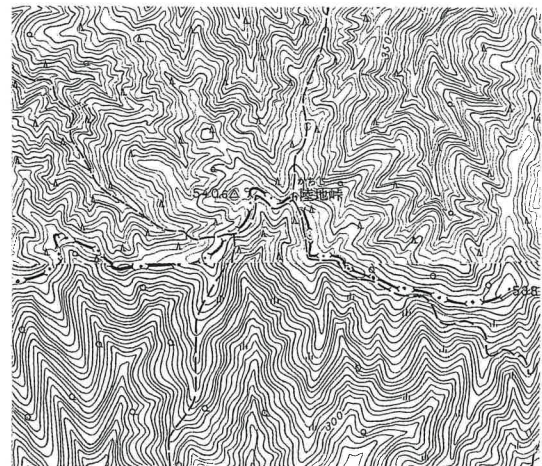


黒土峠から梓峠への路線 (1/25,000)

6. 佐伯市直川陸地峠

旧直川村が指定文化財としている西南戦役古戦場陸地峠の範囲は、現地に残る戦跡の一部分である。指定部分は宮崎県北川町陸地に通じる峠の西側であるが、周辺には多数の台場跡が分布するようである。

今年度は峠の東側300m程の範囲にある台場跡8基の略図作成を行ったが、さらに東方に分布は延びており峠東部の全体把握は未完成である。峠西部や南部の宮崎県側に延びたいくつかの尾根にも戦跡は分布するようであり、略図がある程度まとまった段階で台場跡群の分布図を報告したい。



陸地峠の位置 (1/25,000)

総 括

今年度開始した西南戦争戦跡分布調査は、測量調査を佐伯市宇目椎葉山遺跡で行い、戦跡確認のための踏査を大分市、佐伯市・佐伯市蒲江・直川・宇目、大野郡三重町で行った。上記市町村内の悉皆調査ができたわけではなく、今年度は氷山の一角を明らかにしたに過ぎないと考えており、今後も追加調査が必要である。

近代戦跡の現地調査によってどのような情報が得られるのか、ひとつの事例として椎葉山遺跡の測量調査結果に基づき検討してみたい。

発見した銃弾・薬莖は台場1から台場3までの北面と、そこから北側の尾根上部、その北に続く尾根の西側斜面に帯状に分布する。特に40m以上離れた一帯に錫と鉛の合金製銃弾と青銅製銃弾がまとめて出土したのは薩軍のものである。尾根上の台場群からこの一帯に向けて射撃が集中した結果を反映しているのだろう。一般的に西南戦争では、両軍とも台場の前面の立ち木を伐採し、それで鹿柴を作り、さらに柵を二重、三重に巡らせていたという。椎葉山の場合も台場から40mほど離れた薩軍の銃弾の集中する場所の手前に、柵を巡らせていたのではなかろうか。官軍側の「熊本鎮台戦闘日記」他にこの日のことが記録されており、鹿柴木柵数重植立られていたことが分かる。それによれば、大原口攻撃ノ部署ということで、左翼繁茂山と陸地峠本道と右翼大原越（椎葉山のある尾根線を北方に行くと大

原越の尾根となる)とに分かれて進撃する計画であった。以下に引用する。

午前第一時右ノ部署ヲ以テ諸道ヨリ進撃スト雖ハ前夜暴雨黒雲天ヲ蔽ヒ泥土道ニ満チ進行大ニ遅緩セリ右翼椎葉山ノ賊壘ニ迫ラントスルニ當リ東方既ニ白ク彼ノ發見ヲ慮リ外口ヲ待ツニ違アラス山腹ヨリ急ニ之ヲ襲フ然リト雖ハ鹿柴木柵數重植立衝突ノ術ナク同第八時兵ヲ収メテ舊線ニ還ル他ノ諸道皆兵ヲ収メテ退ク我軍死傷尤モ多シ士官三名下士卒十六名即死士官二名下士卒四十三名負傷

「熊本鎮台戦闘日記」附録死傷之部にはこの戦闘の死傷者一覧がある。警備隊の戦死16人、後日病院で死んだ者9人、負傷18人、熊本鎮台第十四聯隊第一大隊第四中隊の戦死4人、後日病院で死んだ者6人、負傷11人である。合計の戦死者35人、負傷者29人である。

西南戦争では薩軍側部隊の日記が1点存在し、「鹿児島県史料 西南戦争」第三巻で活字化されている。幸いにも椎葉山と直川村の陸地峠守備を担当していた部隊のものである。7月16日に陸地峠は官軍に奪われたので、次に引用する部分の日記は椎葉山のことと考えてよい。

「明治十年薩軍資料」五冊ノ内第一号四ノ九番小隊日記一（以下の7/26・27の記事）

(7/26) 一鉄製弾貳百貳十発 右ハ番兵先為探打左右小隊工差送り候事

次に引用するように翌日支給した鉄製弾の合計が500発であることを考えると、この日の残り280発は何処か別の部隊に送られたものか。探打というのは戦闘時の射撃ではなく、相手を威嚇するために行う無駄撃ちに近い射撃のことであろう。鉄製の弾丸は銃の口径に合わず、紙を巻いて射撃していたとの記録もある。軽いこともあって、遠くに飛ばず、命中も覚束なかったようである。別に錫や銅の合金弾も所持しており、発見した薩軍の弾丸のことを考えると実際の戦闘では合金弾を使ったのであろう。

(7/27) 一鉄製弾三百三十発 一雷管三百三十粒 左右小隊番兵先守場へ差遣候事

一鉄製弾百七十発 雷管百七十粒 右ハ左小隊右半隊守場へ差遣候事

遺物は頂上の台場1の土塁部及び外側での発見が多かった。ここでの銃弾の種類はスナイドル銃弾7点、スペンサー銃弾3点、四斤砲弾1点であり、官軍が発射したものと考えてよさそうである。スペンサー銃の薬莖1点が土塁部外側にあったのは、色々原因を考えることができる。①官軍が台場直前まで来て撃った。②薩軍もスペンサー銃を使った。③官軍が捨てた薬莖を薩軍が拾い集めたが、ここに落ちてしまった。④その他。どれが正しいのか結論は不明である。

この日記には戦死・負傷等を附記した名簿もある（「明治十年[#]七月改之 左右小隊名簿奇兵第三大隊三番中隊」『明治十年薩軍資料』）

中隊長は仁禮吉之助である。左小隊長の岩切正九郎は開戦初期の熊本県植木の戦いで乃木希典の第十四聯隊旗手を斬り、聯隊旗を奪ったとされる人物である。

表 奇兵第三大隊三番中隊左右小隊名簿

	人数	8月6日		備 考
		負傷	戦死	
右小隊壺番分隊一	6人	1		右小隊長は松崎覺二
壺番分隊二	3人			
貳番分隊一	7人	2	1	
貳番分隊二	7人	1		
三番分隊一	8人	1		1人は7/29延岡へ入隊
三番分隊二	5人	2		
四番分隊一	5人		1	
四番分隊二	5人			
右小隊の三官・喇叭・軍曹・伍長・兵士の計50人 / 夫卒7人 / 小計57人 三官とは幹部のこと。				
左小隊壺番分隊一	6人			左小隊長は岩切正九郎
壺番分隊二	6人			
貳番分隊一	5人			8/4に1人負傷
貳番分隊二	7人			
三番分隊一	5人			1人は7/27延岡大隊へ帰隊
三番分隊二	7人			
四番分隊一	6人			
四番分隊二	4人			
左小隊の三官・喇叭・軍曹・伍長・兵士の計49人 / 夫卒7人 / 小計56人				
三番中隊には、他に給養軍曹3人・給養伍長3人・給養夫卒12人・雇夫32人がいた。給養とは補給・輸送などを担当した。				

以下、戦闘のあった日の日記を引用する。

八月六日 雨

本日午前七時比ヨリ、我隊守兵場右小隊壱番・貳番・三番分隊之間工敵ヨリ相掛、則戦争及候処シハラク相戦、台場之間五六間モ敵ヨリ寄来候処、味方ヨリ切込ニ相掛敵ヲ打ちらし、其内第一大隊一番中隊ヨリ応ゑんトシテ来リ仕合ニテ、トモニ切込ミ賊死骸貳拾名余内三名師官等相見得、一ノ一中隊長と師官切合敵師官ヲ切コロシ、一ノ中隊長手負ニテ我隊分捕数多有之、左ノ通ニテ候間午前十一時過敵打ちらし、我隊右之守兵台場工引揚大勝利ニテ喜敷事ニテ仕合御大座候事也、

本夜暗号

問 辨カ、 答 慶、

右之通決議候事、

矢ヶ内出張

奇兵

八月六日 本営

第三大隊

三番中隊

各隊隊長中

一賊死骸貳拾名余

一手旗三本

一七連玉千発余 (引用者註：7連発銃であるスペンサー銃の弾丸)

一針打弾薬千発 (同上：スナイドル銃・スペンサー銃等の弾丸)

一時計式ツ

一刀四本

一針打銃四挺

一長七連銃拾挺

(同上：長スペンサー銃のことか)

一腰具拾ヲ

(同上：弾丸入れの胴乱のことか)

一短銃壹挺

但中折弾薬相添

一金五拾円

但隊附夫卒分捕ひん

一外套二着三着

一喇叭壹ツ

一手帳并書状無数

一烟草入四ツ五ツ

但金具金銀

右本日矢ヶ内守兵場戦争ニテ分捕、右之通候ニ付則当所本営工戦死手負一所ニ届申出置候事、

手負戦死左之通

(略)



信管発見状況

右本日矢ヶ内本営工届申出置候事、

八月六日

一針打弾薬式百四拾発

右延岡奇兵製作所ヨリ送り来リ、午後七時拾五分前相届キ、正二相受取候事、

一主取夫太郎儀、本日午後五時比延岡ヨリ買物トシテ帰宿候事、

一岩切助右衛門事、戦死才領トシテ熊田迄差越候事、

第三大隊三番中隊

↓豆殻峠

↓エゴオノ山

↓椎葉山

左分隊長代理

小濱喜之助

右之通致決議候事、

明治十年八月六日

奇兵

本営

第三大隊三番中隊

右小隊軍曹代理

佐々木政二

右同

岩下 求

右同

朝日東二

第三大隊三番中隊

左小隊軍曹代理

川俣治兵衛

右之通決議候事、

明治十年八月六日 奇兵本営

右小隊1～3番分隊の守備中に官軍が攻撃してきたことが分かる。7月段階に作成された名簿によればこの人数は36人である。名簿ではこの日は負傷7人、戦死2人となっているが、戦闘当日の日記では負傷9人、戦死2人である。名簿と照合した負傷者は以下の9人—大浦重樹（左小隊分隊長）・日高敬介（右小隊壱番分隊一）・初野猶一（右小隊貳番分隊一）・橋元憲藏（右小隊貳番分隊一）・肥後重愼（右小隊貳番分隊二）・吉瀬莊一（右小隊三番分隊一）・圖師源左衛門（右小隊三番分隊二）・柳田今之丞（右小隊三番分隊二）・丸田袈裟次郎（隊付夫卒）—、戦死者は2人—大平熊太郎（四番分隊軍曹）・上山平藏（右小隊貳番分隊一）—である。四番分隊が一人いるだけで、日記の通り一番から三番分隊までが戦闘の中心だったのである。壱番分隊二だけは負傷者も戦死者もいないが、他は満遍なく存在する。半数が宿舎で休憩していたとかではなく、全員が配置に就いていたのである。

5基の台場に36人、平均すれば一基の台場に7人くらいとなるが、規模の大小があるのでそうではなからう。仮に台場の土塁部上面の長さに比例するとすれば、台場1は12m、台場2は4m、台場3は6m、台場4は12m、台場5は8m、合計42mとなり、一人分の長さは約1.2mである。逆算すると台場1には10人、台場2には3人、台場3には5人、台場4には10人、台場5には7人の計35人となり、はみ出た1人は台場1に加えておこう。勿論、戦闘中に銃弾が集中した頂上部には加勢に行っただろう。

日記によれば、戦闘直後に戦場に散乱する諸々のものを回収したことが分かる。七連（スペンサー銃）玉千発余、針打（スナイドル銃等）弾薬千発、とあるが当時500発単位で箱に入れていたので、これは未使用弾丸を箱単位で分捕った可能性が強い。No.33の小型薬莢について磯野照明氏に鑑定して頂いた。以下に掲載する。厚くお礼申し上げたい。

椎葉山で出土したNo.33の使用済み薬莢は、計測した数値から.32口径のリムファイア・カートリッジで、.32 Rimfire Longと呼ばれるものです。.32 Rimfire Longカートリッジは、1861年6月22日にアメリカで発表されたス

ミス・アンド・ウェッソン (Smith & Wesson) No.2リボルバー用として開発されたもので、土佐の坂本竜馬が所持していたと言われている No. 3 リボルバーにも使用されています。

この.32 Rimfire Longカートリッジは、太平洋戦争勃発時まで日本に輸入されており、そのためアメリカから多様な形式・メーカーのリボルバーが輸入されていますが、年代的に見ると、スミス・アンド・ウェッソン No. 3 リボルバーが使われていたのではないのでしょうか？

日記中に、一短銃壱挺 但中折弾薬相添とあるのがこれであろう。

戦闘後の夕方、延岡にある奇兵隊専属の銃器・弾薬製作所から針打銃弾薬240発が三番中隊に届けられた。100人の部隊に240発である。これ以前に届いた最も最新の弾丸は先に引用した7月26日・27日の鉄製銃弾550発であった。薩軍の困窮ぶりが窺える。翌日の日記にも関連記事が載っている。

八月七日 雨

一針打弾薬カラ四千五拾発

一七連右同千式百六拾発

一損シ鉛玉七拾

右三行延岡製作所工差送り候事、

本夜暗号

問 船カ、 答 嵐

右之通決議候事、

矢ヶ内出張

八月七日

奇兵本営

各隊隊長中

【右上に続く】

一山刀壱本

右矢ヶ内出張本営ヨリ伊地知相受取候也、

手負 栗山良七

右同 黒江吉之丞

手負 人員 東彦右衛

右同 橋元英助

右同 木場源左衛門

右同 大山十介

右同 岩下傳之丞

右七名帰隊相成候事、

軍曹

大平熊太郎

兵士

上山平藏

右兩名一昨矢ヶ内台場にて戦死いたし、本日午前十時過くま田迄才領として岩切助右衛門差越、夕五時過熊田ノ内吉祥寺工葬埋ス、今日午後八時比帰陣いたし候、遺髪等熊田奇兵大小荷駄田村甚藏工相渡置候、

戦闘翌日の日記では多数の弾薬カラ（薬莢）も回収できたことが分かる。スナイドル銃の薬莢4,050個、スペンサー銃薬莢1,260個に加え、損シ鉛玉七拾（使用済み弾丸70個であろう）個とある。薬莢の数に比べ、回収した弾丸の数は極端に少ない。銃弾は土に埋まったり、木にめり込んだり、山の向こうに飛んで行ったのだろう。もしこれが逆に薩軍が負けて逃げ去った戦場であったならば、官軍は金属回収なぞしなかったので薬莢や使用済み銃弾などは遺棄されたままになっていただろう。

戦闘前後の薩軍側の日記が残っているという点で、官軍のいう椎葉山或いは蛇葛山、当事者のいう矢ヶ内守兵場という戦跡は極めて珍しい事例である。現在まで残っていたというのも貴重である。今回は測量期間実質4日間という調査だったが、調査範囲を広げればより詳しく具体的に戦跡の状態、戦闘の状態が明らかにできるだろう。この概報執筆中に行った椎葉山以北の県境尾根踏査で25基前後の両軍の台場を発見した。南方を意識して作られた五稜郭を連想させる六稜台場や星形台場、隅部に突角部を設けた台場等の小型台場が800mにわたり連続する場所があり、ここが椎葉山を攻める最前線基地だったようだ。

今年度の分布調査の結果、県境東部地域（佐伯・蒲江）で台場跡が少ないことがわかった。特に、佐伯・旧蒲江の境界にある場照山から西に続く県境尾根に全く台場を確認できなかったのは意外であった。反面、台場跡が集中する直川村陸地峠や宇目町の特殊性が際だつこととなった。また、星形台場というものが存在し、それが特殊であるということも分布調査の集積によって判明した。西南戦争の戦跡は大部分県下に多数存在する筈であるが、図面としての記録はもとより分布調査もやっと始まったばかりであり、今後も継続してゆきたい。

〔引用文献〕「明治十年役薩軍資料」『鹿児島県史料西南戦争第三巻』1980鹿児島県維新史料編さん所編集

「熊本鎮台戦闘日記」1882陸軍参謀本部

報告書抄録

ふりがな	おおいたけんないいせきはくつちょうさがいほう	シリーズ番号	
書名	大分県内遺跡発掘調査概報	編著者	栗田勝弘・高橋信武・山田拓伸
副書名		編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
巻次	8	所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
シリーズ名		発行年月日	2005年3月31日

ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しいばやまいせき 椎葉山遺跡	大分県佐伯市 宇目大字 大平	430	434015	32°48'0"	131°43'47"	2004.11.8 ∩ 2004.12.7	5,000㎡	分布調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
椎葉山遺跡	戦跡	明治時代	台場	銃弾・砲弾・薬莢	西南戦争激戦地

要約	西南戦争は1877（明治10）年2月から9月に九州を部隊に起こった幕末維新期最後の内乱である。大分県内でも、県南部の山間部に戦跡が残存しており、国庫補助を得て行っている大分県内遺跡発掘調査の中で今年度から分布調査を開始した。本年度は佐伯市椎葉山で測量調査を行うとともに、各地で踏査を実施した。農業関連の分布調査結果とともに記載した。
----	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

大分県内遺跡発掘調査概報 8

平成17年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
 所在地 〒870-0011
 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
 TEL (097) 597-5675
 印刷 大野印刷有限公司
 〒874-0902
 別府市青山町1-7
 TEL (0977) 21-0505
